

一 わたしの隣人

真新しい部屋の中には、数個の段ボールが点々と置かれている。わたしはフローリングの上に寝転がり、ぐーっと伸びをした。

「はあ……上手くやっていけるかな」

誰が聞いている訳でもないのにぼつりと呟いたわたしは、床の上をごろごろと転がる。上京して初めての社会人生活。急な引越しにもかかわらず相場に比べても安かったこの物件を、難しいことを考えずに即決した日は記憶に新しい。

——いや、正直に言えば、あれは考えずというより考えられずだったのかもしれないが——今は、思い出したいくない話だ。

實際来てみればしっかりと整った集合住宅で、近隣への不満も今のところ見当たらない。

——まあ、引っ越して初日だ。何かが見つかる方がおかしいというものだろう。今はそれよりも、来週から始まる仕事のことを考えなければならぬ。
ごつ、と段ボールに膝がぶつかり、僅かにめり込む。この段ボールには固いものは入れていなかったはず——と記憶を辿った、そのとき。

——ごん。

隣から、小さな物音がした。

「？」

なんとなく、上半身を起こしてそちらへ視線を向ける。
角部屋に住むわたしの、唯一の隣の部屋。そういえば、まだ挨拶に行っていないかった。

行くべきだろうか。

いやいや、しかし、女性の一人暮らしだ。

行かないほうが良いのかもしれない——そんなことを逡巡していると、再び。

——ピンポーン。

今度は、チャイムの音。

もしかして、隣人かな……？ 無視するわけにも行かないからと、わたしは起き上がってインターフォンのカメラを確認する。

そこには——大柄の人影が映っていた。

そうとしか形容できないのには理由がある。彼の身長が高く、カメラに映る高さに顔が無いからだ。

「……」

無意識に、身体が硬直する。

大きな身体を持った男性。それだけで、どことなく恐怖を抱いてしまうのはわたしだけだろうか。

——いや、もしかすると、本当にわたしだけなのかもしれない、とは思う。そう思ってしまうあの記憶に蓋をするために——わたしは、ここに来たのに。

どうしてまた、こんなことになっているのだろう。

いまだ立ち尽くしたままのその男は、宅配便の制服を着ている様子もない。彼がどんな用件でここに来たのか、全く分からない。

どうしよう——。

——ピンポーン。

「!」

もう一度、鳴った。

心臓が嫌という程に早鐘を打っている。

しかし、このまま無視を決め込むことなんて、わたしには出来なかった。恐る恐る脚を動かす。玄関にゆっくりと近づき、鍵を外して。

そうして——

「——お前」

彼は第一声、そうぼつりと呟いた。

「……はい……？」

消え入りそうな声で返事をしながら、わたしは恐る恐る顔を上げた。
しかしその瞬間——わたしは、目を奪われていた。

どこか浮世離れた白髪に、瑠璃の瞳。日本人では無いのだろうか。しかしその端正な顔つきの雰囲気は、外国人には見えない。

突然変異、アルビノ——いろいろな可能性がわたしの頭の中で回っていた。
しかし、そんなことどうでも良いのだと思える出来事が起きた。

彼のゴツゴツとした片手が。

わたいの手首を掴んでいた。

「え」

「お前……こんな、こんなところに、」

「……え？」

彼はもはや、まともな日本語を話せていない。何を言っているのか、何を言いたいのか、まるつきり分からない。

混乱を隠せないわたしを見て、彼も何か思うところがあつたらしい。ハッと手首を解放すると、居心地悪そうに首筋を擦る。

「……すまない。なんでもない」

「はあ……」

思わず手首を擦ったわたしをしばし見つめてから、彼はふとわたしの顔を見た。

「お前、名前は」

「……………」

普通に考えて、だ。

初対面の異性に手首を掴まれた挙句、名前を尋ねられる。

こんなことが起こって良いものだろうか。

わたしは警察への通報すら考えた。それか、「迷惑です」とでも一言言い放って扉を閉めてしまおうかと思った。

けれど——意を決し、改めてその顔を見た時。

わたしは、自分の心から毒が抜け落ちていくような感覚がした。

彼のその、瑠璃色の瞳が——あまりにも、熱を孕んでいて。
それは——そう。

——まるで、母親を見つけた迷い子のように。

「……あや、です」

「あや」

「……はい」

彼はしばらく、その名を噛みしめるかのように沈黙していた。やがてゆっくりと一つ瞬きをする、静かにこちらを見つめ直した。

「あや」

「は、はい」

「ありがとう」

——ばたん。

静かに去っていく足音を聞きながら、わたしが安心していた時間は十分を超えるかもしれない。

それくらいに、意味が分からなくて。それくらいに、衝撃的で。

この時のわたしには、通報できる猶予がいくらでもあったと思う。けれどわたしはその間にも、そしてその後にも、ついには一度も通報しなかった。

これが、出会った日の全て。

——彼とわたしの運命を決めた、邂逅かいこうの記憶だった。

目次

一	わたしの隣人	1
二	吸い込まれる	14
三	不器用な接待	23
四	熱	31
五	墮落	62
六	噂と現実	76
七	それは、水音よりも	130
八	非日常	142
九	運命と	168
十	空は知らない	181
十一	離別	195
十二	生死の境	211

十三	もう一度――	222
十四	拒絶――	230
十五	追憶――	243
十六	番――	254
十七	千年の物語を――	267

二 吸い込まれる

「ねえねえあやさん。あなた、大丈夫？」

「え？ 何がですか？」

ゴミ捨て場でたまたま居合わせたアパートの住人。

とてもお話が好きなおばさまだったようで、世間話をしているうちにそんなことを尋ねられた。

「二階の角部屋はね、誰も寄り付かないのよ。だからお家賃も安いって大家さんが言っていたわ」

「確かに安かったですけど……寄り付かない、というのは？」

「お隣の男性が、ものすごく怖い人なのよ」

目が合ったら最後、連れ去られるそうよ——そんな噂を語って聞かせてくれたおばさまの話の思い返しながら、わたしは階段を上っていた。一階の住人の彼女とは既に別れている。

隣の住人——思い返されるのは、引越してきたその日、謎の一言だけを残して帰っていった白髪の男性。その後聞こえた扉の音の距離からして、彼こそがきつと、隣の住人なのだろう。

確かに彼は身体も大きく、どこことなく威圧感があった。わたし自身、彼のことは、確かに怖かった。

「……どうして、こっちに來てまで」

ぼつりと、と、わたしの唇から零れたのは——嘆きの言葉。

嫌な記憶が——ぶり返す。

『なあ、お前って俺のこと、本当に好きなの？』

『え……？』

わたしには、恋人が居た。幼いころからの幼馴染で、腐れ縁。なぜか大学まで同じであることが発覚したその日から、四年間。——なし崩し的に付き合い始めた。

しばらくは、清い恋人生活。そのうち泊まりのデートなどもした。

——けれど。

夜のわたしは——まったく言って良いほど、感じることができなかつた。

——本当に彼のことが好きだったのか。今となつては、分からない。器用に演じること
もできず、それでも挿入しようとした彼に覆いかぶさられたとき——全てが嫌になつた。

あの隣人と同じように、彼も大柄で。身長差が激しく、彼のそれはとてもではないが入

る気がしなかった。

それでも挿れようとしてくる横暴さも、なにもかもが。

——わたしが逃げ出したきっかけの一つとして、胸の奥に押し込められている。

あれからわたしは多分、大きな男性を恐れている。だから手首を掴まれた時、ゾツとした。だが——直ぐに謝られたし、そもそもわたしは目が合ったにもかかわらず、どこにも連れ去られてなどいない。

彼が怖いのは、わたしの主観としては事実だけれど。そんなおかしな噂で人が寄り付かないのは——少し、可哀そうだとも思った。

——それに。

「……綺麗、だったな」

あの、瑠璃色の瞳。あれは、どこか吸い込まれていきそうな魅力すらあつて――。

「おい」

もう一度あの瞳を見たら、わたしはどうなってしまうのだろう。

今度こそ連れ去られるのだろうか？ いや、それとも――。

「あや」

「へっ!？」

びくう、と肩が跳ねた。見知らぬ土地で、慣れた名を呼ぶ男性の声。

しかもやけに聞き覚えがある。

それは、あの時の――。

「あ……」

――隣人。

「お、……おはようございます」

消え入りそうな声で挨拶をするわたしを、彼はじっと見下ろしている。

目を合わせて良いのか、分からない——そんなことを思いながら肩を縮こまらせるわたしに、彼は言い放った。

「……こんなところで何をしているんだ」

「え……」

何も何も、家に帰ろうとしていたところ。そう答えようと思ったのだが、何かがおかしい。

そう。それは、自分の体の向きだ。

彼は自分の部屋の玄関を開いてこちらを見ている。

しかし、わたしの身体は、それに対して正面から向き合っている。

——正面から。

「あ……す、すみません！」

どうやらわたしは、考え事に耽るあまり入ろうとする家を間違えていたらしい。

慌てて頭を下げ、素早く隣の部屋へ行こうとするわたしを、「待て」と呼び止める声。それでも逃げかけたわたしだった——

「ひっ……!？」

ガチン、とまるで魔法でもかけられたかのように、わたしはその場から動けなくなっていた。

おかしい。何かがおかしい。

まるで心臓を鷲掴みにされたかのような、違和感。

彼が、彼がその声で呼び止めると、まるで——

抗えない鎖に縛られたような感覚がして。

「……来い」

「……」

「分かっているんだろう。きっと、お前も……」

「なに……が……」

意識が、朦朧とする。

ふらふらと動く脚が、彼の元へと一歩一歩近づいていく。

そうして——抱きとめられた、その胸板は。

やけに分厚くて、温かくて。

「あや……」

吐息混じりのその声が、低く、痺れるようにわたしの耳へと届く。

だめだ。やっぱり、何かがおかしい。

彼と出会ったその日から——わたしの何か、壊れようとしている——。
それは、まるで。

人ならざるものの、力のように——柄にもなく、非現実的なことを思いながら。
吸い込まれるがままに——わたしは。

その分厚い扉の向こうに、連れ去られていた。

三 不器用な接待

「飲め」

「……えつと……」

「嫌いなのか」

「い、いえ」

わたしをあのがつしりとした腕で引きずり込んだ彼が、そう言つて差し出したのはコーヒーだった。

「飲むか？」でも「コーヒーは好きか？」でもなく、開口一番が「飲め」なところが、おそらくこの人が近隣住民に恐れられている所以ゆえんなのだろう。

わたしは心臓の激しい鼓動を耳の裏で聞きながら、恐る恐るコーヒーを手にする。

もしかすると、何か入れられているんじゃない——そう思わなかったわけではない。けれど、頭がそう考えても、心がそれを否定した。

——何故なのかは、わからない。

彼がコーヒーを淹れている間に、わたしはいくらでも逃げられたかもしれない。今になつてそんなことを考えるも、やはり後の祭り。

結局わたしに出来るのは、出されたあつあつのコーヒーをちびちびと飲むことだけだつた。

「仕事は」

「……はい？」

「仕事」

「……」

いくらなんでも、言葉が足りなすぎる——それでも意図を辛うじて汲み取ったわたしは、「しがない事務職です」と静かに答える。

「そうか」

そしてまた流れる沈黙。わたしがコーヒを啜る音だけが、静かに響いていた。

「あの……」

「ああ」

「……あなたは飲まないんですか」

なぜ、来客者であるわたしが間を繋いでいるのだろうか。自問自答しながらも思わず開いてしまった口を、彼は何故か目を見開いて見ていた。

それは、そう——まるで。

赤ちゃんが初めて喋りだした瞬間の、父親のようで。

「……私はあまり飲み食いをしないんだ」

「はあ」

彼の座っていたソファが、僅かに軋む。彼が自分の膝に両肘を置いたからだ。

そう言えば、このご時世にしては珍しく、彼は袴姿だった。

そんな事も気づいていなかったのか——と彼の瞳の吸引力に恐々としていると。

「お前は何故ここに来た」

「今までは何処に居た」

「何処で生まれた」

「何をして生きてきた」

——怒涛の質問攻めが始まった。

わたしが回答しきるその直前に、間髪を入れず飛んでくる質問。これまでの無口キャラは何処に行ったのか？ と思わなくもないが、そもそも本人が無口を自称した訳ではなかった。

全てに回答し終わる頃には、コーヒーもすっかり冷めていた。

「……そうか」

しばらく質問攻めを続けてようやく満足したのか、彼はソファに深く腰掛け直した。それをちらりと、目で追う。

刹那——違和感を抱く。

「……」

——気の所為、だろうか。

袴で分かりにくいけれど——彼の脚の中心が、やけに目立っている、ような気がする。収まりかけていた鼓動が、再び早まってきた。

質問で気が抜けていたけれど、わたしは今、異性の手で部屋に連れ込まれている。

このままでは、何かが起こってしまうのではないだろうか——。

「あ、あの……っ！」

おずおずと口を開くため、視線を顔へ動かした、その時。わたしは息を飲んでいた。彼の瞳の色が——いつの間にか、変わっている。

いや、確かに瑠璃色ではあった。けれど何かが違うのだ。
それは、そう。

獣のような、熱を孕んでいる、みたいな――。

「……私は、方法知らない」

「なんの……？」

「愛を伝える方法を」

今、彼は――なんと言った？

「あや」

「！」

その言葉に放心していたのは、ほんの数秒だったはずだ。

それなのに、何故——わたしは彼に抱かれている？

和洋折衷とはよく言ったもので、連れ込まれた寝室に用意されていたのは見るからにふかふかのベッド。

「え、あ、あの、わたし」

「あや。……あや」

——なに。この、声は。

彼がわたしの名を呼ぶ声が、小鳥のように聞こえる。

小さな巢の中で親を待つ、幼き小鳥のように——。

どさ、と勢いよくベッドに落とされても、痛みはない。

ただ、彼の深い熱が、全身で受け止めきれないほどの情が、真っ直ぐに襲いかかってくる。

思わず身を振るわたしの上に馬乗りになって、彼は——その低い声音で、言った。

「お前を、愛させてくれ」

四 熱

無骨な指先が、わたしの肌を撫でる。

力付くで押さえつけられているわけではない。手足を縛られているわけでもない。それなのに、なぜか——ベッドから抜け出すことが出来ない。

わからない。わからない。これは一体、何なの？

どうしてわたしは——彼に抗えないの？

恋も愛も、経験はしている。だからわかる。——こんなことを、わたしが許すはずがないことなんて。

でも、何かがおかしい。

彼の手つきは、その眼差しは、あまりにも強い、熱を孕んでいた。

例えるなら、長い間ずっと待っていた相手に、ようやく出会えた、みたいな。そんな深

い深い情熱を伴っていた。

「この時を待ちわびていた……」

「……え」

——今、心を読まれた——？

そう感じてしまうほどのピンポイントな発言に、わたしは瞳を揺らす。本能的に逃げかけた腰がぐっと抱き寄せられ、ベッドに逆戻りする。

出会って数日のわたしたちに、待ちわびるものもない——そうツツコミを入れない気持ちもある。

けれど彼の必死な顔を見ていたら、そんな小さな疑問も容易く流されてしまいそうになる。

そんなに気の弱い女じゃなかったはずなのに。どうして——。

「んっ……」

彼の手が、わたしの服の下をゆっくりと這う。腹筋の筋を辿られ、上擦った声が漏れた。

——それが、二つ目の疑問だった。

おかしい。

わたし、彼に触れられて——感じてゐる？

「啼け」

「……え……」

「お前の啼き声が」

彼の唇が、わたしの耳元に近づく。媚薬のような、何処か退廃的な吐息の香りに背筋が震える。

「聞きたい」

「くひっ……!？」

——い、まの、なに。

まるで喉から、絞り出されたかのような。

抑えきれない、我慢できない、声。

「あ……ふあ、あんっ……!♡」

「感じるだろう？ 私の触る箇所全てが、お前の性感帯だ」

なんで。そんなの、聞いたことない。

しかし、そう問い詰める余裕もない。抑えきれない声が断続的に漏れ、呼吸が荒くなっている。

息を継ぐのに必死で、それ以外の事を考えられない。

「当然のことだ。なぜならお前は——」

彼がわたしの耳元で、何かを囁いた。しかしわたしは、霞がかかる自分の思考の中でそれを理解することが出来なかった。

そもそも彼の言葉の大半が、今は左から右へと素通りしてしまっている。この状態で難しい話をされても理解^{わか}るはずがない。

それなのに彼は、止まってくれない。言葉を並べ立てることを止めようとせずに、次から次へと投げかけてくる。

掻い摘んで理解するわたしの脳が、溶け落ちてしまいそうな言葉ばかりを——。

「どうしてそんなにも可愛いんだ」

「食べてしまいたいな。髪先从足先まで、全てを……」

「なあ、良いよな？　まずはその唇から——食らわせてくれ」

「ふう、んっ♡」

じゅわ、と、果実が唇の上に広がったような気がした。それが彼の唾液の味だと気づくまでには、随分な時間を要した。

だって彼が、わたしの瞳をその大きな手で覆い隠して口づけをしてくるのだ。直前までの言葉が聞き取れていないわたしからすれば、突拍子もない行動にも程があった。

でも、これが——やけにわたしの心臓に、突き刺さる。

水音が、香りが、味が、ダイレクトに伝わる。全てがわたしを呑み込まんと躍起になっているかのような、そんな強烈な波に攫われて、わたしの思考はますます鈍っていく。

どう、形容したら良いのだろう。

きつとこれは。

ここちよくて——きもちいい。

「っふふ……善い顔だ」

「あ……」

唇を離した彼が、綿菓子のような声で言う。わたしは無意識に伸ばした両手を彼の首に回し、自ら口づけていた。

美味しい。キスの味って、こんなにも甘くて美味しかったっけ。

それほどまでに心が満たされる口づけ。つい、もっと、もっと、と欲張ってしまう。

こんなにも口づけが善いものだとは知らなかった。いや——彼とのそれが、特別なのだろうか。

そうでなければ——おかしい。

触れられ、口付けられるだけで呑み込まれるような、軽率な女ではない——はず。

「あや」

「んっ……っ！」

意識が、他方へ向きかけていたことを悟られたのかもしれない。ぶわっ、と彼の匂いが広がったかと思えば、その熱い胸板に鼻先を埋めているようだった。

抱き締められる腕が後頭部にあることから、辛うじてわかるその状況。暗闇に包まれながら、無意識のうちにわたしは、彼の背中へ両手を回していた。

そのとき——。

「——ひっ」

ぐり、と、何かが押し当てられる。

いや、何かなんてものではない。あまりにも大きくて、熱くて、凶暴なそれ。袴越しにぐりぐりと押し付けられるそれが、わたしの肉芽を的確に押し上げる。

「あっ！♡」

色気もなく、磁石で吸い寄せられているのではないかと思うほどに、的確に。急所を擦り上げるその感覚に、わたしの腰はカクカクと震える。

どうしてこんなにも的確に刺激できるの。どうして逃げようともがいてもぶれないの。

わからない——わからない。

そんな疑問があふれているわたしを待つ様子はなく、腰を離れた彼の指先が動き出す。鼠径部をそつと撫でたその手が、わたしのそこをつうつ♡と撫で上げたのだ。

「くひっ……♡」

がくつと跳ねて、腰が逃げる。しかしそれを許す彼ではない。

片手はしっかりと腰を抑えたまま、もう片方の手で何度も何度も、断続的にそこを刺激される。

「ひゃっ、うっ♡ いやあっ♡♡」

「善い声だ。そのまま聞かせろ」

首をぶんぶんと振って悶えるわたしを、静かな、それでいてどこか熱を隠し切れない瞳で、彼は見下ろし続けている。

——別に、聞かせたくて声を出しているわけではない。ただ、彼の手技があまりにも巧

みて、勝手に声が出てしまうだけで。両手はシーツを掴み、その快楽から少しでも逃げることに精一杯だというだけで。

——そんなことを、必死に脳内で言い訳していたら。

「いあっ!？」

今度は二本の指先で、きゅつとわたしのそこを挟みこんで転がしてきた――。

「ひやあっ♡ や、らめえ♡」

「何がダメなんだ」

「なにが……つてえ……♡」

彼は淡々とした変わらぬ態度で、そんなことを聞いてくる。その間にも指は止まらずに、こりゅこりゅ♡ と肉芽を転がして、押しつぶして、擦り上げる。

そのたびにわたしの腰は跳ね、なすすべなく快楽に飲み込まれていってしまう。

「お前は、本当にここが好きらしいな」

——そんなことは一言も言っていない。言っていないのに、なぜか彼はそう決めつけて、口角を上げた。

「ならば——もっと、くれてやる」

目の前に迫ってきた彼の顔で——目の前が真っ暗になる。

次の瞬間——わたしの思考は一気に霞んでいく。舌がじんと痺れて、胸の奥が熱くて。

はふはふと必死に継ぎかけた息を、また、塞がれる。

キス一つとっても、気持ちいい。それどころか、わたしの息が切れるタイミングを的確に悟って継がせてくる。

本当に、わけがわからなくて——もう、わからないこともどうでもよくなってきた

—。

「はあ……♡ はあ、はあ♡」

やがて唇が離れ、必死に息をしていたわたしは——気が付かなかった。
いつの間にかわたしの下半身が——無防備に晒されている事実。

「……ふ、え、……なんっ」

困惑して服を探しかけたわたしの手を絡めとり、ベッドに縫い付けた彼が。静かに目を
細め——言い放つ。

「いい顔だ。——あや」

「——!!」

——なんで。どうして。

こんなにも、鼓動が早まるの。

逃げなきゃいけないのに。

こんなの、おかしいのに。

どうして——。

「あまり余所見をするんじゃない」

「いひっ……!?!」

そんなことを考えていたことさえ、彼にはお見通しなのだろうか。

ぼつりとそう告げられたかと思っただ次の瞬間、下半身を電流が駆け抜けた。

さっきまでの比じゃない、衝撃。もはや快樂なんて名前で語れない。

多分——

——皮が、剥かれた。

「まっ！ ほ、ほんと、に、らめっ」「嘘を吐くな」「ひうつ!?♡」

嘘なんて吐いてない——！ 心の中ではそう、必死に叫んでいる。それでも彼は止まってくれない。

あまりにも敏感なそこを、指先でつつ♡ と撫で上げて。挙句に顔を近づけて——。

——ゆっくりと、舌を這わせてくる。

「ひうつ!!♡ やあ、あっあ♡♡」

だめ。もう、だめ。

腰から下が、麻痺しているかのよう——力が入らない。

がくがくと、跳ねて、震えて。力が入らなくなったりとシーツに沈むたびに、また刺激されて浮き上がる。

それの——繰り返し。

そのうちおなかの奥で、表現のできない感覚がせりあがってくる。

刺激が、繰り返されるたび。ダムの水が増していくような、変な感覚がして。

やだ、こわい。くる、なんか、くる——。

「やあ、らめ、らめらめらめ——ッ!？」

——息が——止まった。

「…………ふふ」

彼の、低い笑い声がした。わたしの——脚の間から。

何かに、どこかに、上り詰めかけたわたしを——彼が寸前で引きずり戻したのだ。

「はっ……はあっ、はっ、は——ッ♡」

「どうした、あや。お前があまりにもためだというから、やめてやったが」

「う、……うううっ」

——そのうち、わたしの頬は濡れていく。

腰が勝手に浮きあがる。彼の手を、彼の舌を求めて。擦り付けようとしてしまう。

その間にも——彼の優雅な笑みは消えない。

身体と、心がちぐはぐだ。何もかも、理解できない。

ただ、はやく——してほしい。

「そんな顔をするな」

欠片も反省をしていない声のトーンで、彼はそんなことを言う。

わたしの頬を丁寧^{ていねい}に拭い、そっと口づけて。むき出しのまま震える内腿をゆつくりと撫で上げて。

やがて妖艶に——言い放つ。

「——素直になればいい」

はくはく、と、わたしの唇が無意味に開閉する。

必死に息をして。必死に頭を回転させていたのに。

その全てに——霞がかかっていく。

「……い」

「なんだ。あや」

もう、いいよ。

わかった。わかったから――

「はやく……ちようだい……ッ♡」

自分が何を口走ったのか。考えるより、先に――彼の口角が上がるのが見えた。

「……いい子だ」

わたしの言葉に、気を良くしたらしい。そんなことを吐息混じりに囁いて、彼はわたしの髪を静かに撫でた。ゆっくりとわたしを撫で下ろす指先が、頬、首筋、鎖骨、胸へと降りていく。下着越しの胸を包み込むように撫でられたかと思えば――

「ふぁ……♡」

胸の突起を、ゆっくりと押しつぶしてくる――。

たったそれだけの刺激。こんなの、日常の事故ですらあり得るくらいの刺激なのに。どうして、さっきからこんなにも、感じてしまうの。

わたしは――不感症だったはずなのに。

続いていた頭の中の疑問が、顔に出ていたのかは分からない。しかしやけに饒舌な彼の口から、理解できない言葉が漏れ出た。

「私には、全て見えていゝ」

「え……あ、あつあ！♡」

いつのまにか彼の顔が、また見えなくなっていた。

ぐちゅ、ぬちゅっ♡ と水音を立てて、彼がわたしの肉芽を舐め上げてくる。そこはきつとむき出しにされて空気に晒され、赤く膨れているんだろう。自分でまともに見たこともないそこを、わたしは今、彼にめちやくちやにされている。

最早腰の痙攣は止まる気配がない。まるで、自分で刺激を送っているようだと思ってしまう。その上彼が、その痙攣すら予測しているかのような舌技でわたしの肉芽を責め立てるから、もう逃げ場なんてものはない。

「んっ……」

彼の吐息が聞こえる。わたしの抵抗をもとめせず、水音を響かせてくる。舌先を尖らせているのだろうか、柔らかいはずの舌から送られてくる鋭い刺激に背筋が反り返って

しまう。

ぢゅるっ♡　ちゅ、ちゅばっ♡

いやらしい水音に耐えられなくて、わたしは震える手を耳へと持っていた。彼がわたしのそこを舐め吸る水音が、やけに耳に残ってしまう。

「……甘いな。お前の愛液は、いくらでも飲みたいよ」

「ひうつ……！♡」

飲み食いはいらないって、前は言ってたのに——そんな突っ込みは心の中で消えていく。そもそも愛液なんか出るわけがないのに。きっとこの水音も、彼の唾液が出している音のはずなのに。必死に言い訳をしながら、わたしは耳を抑えていた手をゆっくりと下ろし、彼の肩を掴む。

「やあ……♡　も、もお、らめえ♡」

もはや息も絶え絶えて、声を抑える余力もない。無防備にベッドに身を委ね震えるわたしを、やがて彼は静かに見下ろした。

「……あや」

「んっ……♡」

荒い息を必死に整えるわたしの頬を包み込み、彼はまた口づけを落としてくる。彼はわたしを酸欠で殺す気だろうかと一瞬思うが、視界が白む寸前で唇を離してくるその無駄な勘の良さが、本当に卑怯だ。

彼の触れ方は、どこか性急なのに、どこか優しい。怖いのに、怖くない。チグハグな感情に呑み込まれながらも、口づけをようやく終えた彼の物が恥部に擦り付けられた時——わたしは何度目かも分からない衝撃を受けることになる。

ぐちゅ……♡ ぬちゅ、ぬちゅっ♡

酷く濡れた、水音。最初、わたしは信じられなかった。
その水音が、わたしの下半身から発せられていることが。

「ちが……ッわたし、こんな♡」

「何が違うんだ」

震えるわたしの言葉に、彼は目を細める。やがて腰を引いたかと思えば、懲りずにまた伸ばされる指先。

「これは——お前が私を求めているということだろう」

「ひ……ッ♡」

「ほら。……集中するんだ」

——わたしの、全てに。

その低い囁きに——意識が霞む。

彼の指先が、濡れそぼったなかへ——つぷりと挿しこまれた。

「くひっ……♡」

びくん、と跳ねあがる腰はまた押さえつけられた。ずりずりと頭上へ逃げる身体は、強引に引き戻される。

入り口を浅く刺激した彼の指は、やがてゆっくりと奥へ入り込み——不意に、ぐっと中を押し上げてきた。

「ふあっ!?!♡」

その瞬間、お腹の奥から何かはずんと響いてきた。思わず漏れた声を止める理性は最早働かない。とん、とん、と断続的にそこを撫でられるたびに、何かがせりあがってくるような感覚がして腰がカクカクと震える。

「やっ♡ らめ、あん♡♡」

「好きなんだろう？ 私に隠し事は通用しない」

「なん♡……ふあ♡、やら、やらあ！♡」

なんか、来る。今度こそ、きちやう。

「今度はどうしたい？ ほら——言葉に出してみろ」

彼が何かを言っている。頭が真っ白で、思考の奥がちかちかとして、何も考えられない。

「ひい♡……♡ おねが、も、あたし……♡♡♡」

「——わかった」

「くひっ——!!♡♡♡」

——な、に。

お腹の奥が、じゅんっと一気に熱くなって。

がくんがくんと、腰が痙攣して。

気づいたら——内腿が、ぐっしよりと濡れていた。

「ふえ………? あ………」

「………ふふ」

——彼は機嫌よく笑っている。けれどわたしの思考はいまだふわふわしていて。

なに——もしかして、わたし、おもらししちゃったの?

「………と………めんなさ………」

「なぜ謝る」

反射的に口にしかけた謝罪の言葉は、彼によって遮られた。彼は、わたしの内腿をつうつと指でたどり——やがて瞳を細める。

「——これは、お前の快樂の証だ」

「——え」

かああつと、顔が一気に熱を持った。快樂の証、つて——それなら、これは——

「——!!」

咄嗟に掛布団を掴み、わたしは顔を覆い隠す。彼はくつくつと笑いながらそれを引っぺがそうとしてくるが、必死に抵抗した。

自分が今どんな顔をしているのか——想像したくもなかった。

しかし。彼がこの程度の抵抗で引くはずもなかった。

「……そうか。ならば——」

「んうっ♡」

「——こっちは、好きにして良いということだな？」

そう言つて彼は、掛布団で覆い切れていないわたしの下半身へと、もう一度狙いを定める。またぬち……♡ と入り口を擦られ腰が震えるが、顔を隠すのに必死でそれどころではない。

「それに、そろそろ——」

やがて彼は、何かをしやべりだす。ぐもった彼の声を、それでもわたしは、無意識なのか拾おうとしていた。勝手にわたしをめちやくちやにしてくる男の声に、耳を傾ける必要なんてないと分かっているのに。吸い込まれるようなその声に、呑み込まれてしまうのだ。

「……欲しくなってきたか？」

「え……ッ！」

——その囁きに、自覚させられた。

わたしの身体に起きてしまった、一つの変化。

反射ではない。それは、本能。

ぐりつと押し当てられた、彼の肉棒を求めて——わたしは自ら腰を擦り付けていた。

おかしい。こんなの。そもそもわたしは、自慰すらまともにしないような人間だったのに。

でも、でも、だって。

彼の熱が、あまりにも凶暴なその肉棒が。

酷く恋しくて堪らないんだ――。

「吞まれろ」

――彼が、いつも通りの命令口調で囁いてくる。

「私に。全てに――」

彼の熱が、押し当てられる。

くすりと、吐息だけの笑みを零してから。やがて彼はもう一度、わたしに洗脳するよう
に、告げる。

「――吞み込まれれば善い」

五 墮落

——呑み込まれる？

出会って二日の、彼に？

おかしい。そんなの、ありえない。

ありえないのに——思考が、霞んでいく。

「ほら……よく見届けるんだ」

彼が、わたしの耳元で、何かを言っている。

霞む視界に、何かが映り込んだ。

それは——毒々しいほどに赤く膨れ上がった、男の肉棒だった。

「あ……あ……っ」

無理だ。入らない——はいらない。

そんなの、無理なのに。

ふるふると必死に首を振っているのに、彼は止まろうとしない。
それどころか。

「……そんなに濡らしておいて、今更。挿れない気か？」

「いひっ……！♡」

ぐりつと、入り口に先端を押し付けられて。わたしの腰が勝手に、ゾクゾクと跳ねる。
おかしいのに。ありえないのに。

挿入^{はい}るわけ、ないのに——！

「あ、あ♡ ああああ……！♡」

——なんで？

なんで、挿入^{はい}ってるの——！？

遠慮を知らないその勢いに、引きずり出される嬌声。痛みのない破瓜^{はか}なんて想像もしていなかった。そもそもわたしに、本番^{ほんばん}が叶うだなんて想像もしてなかったのだから。

頭と、身体が、チグハグで。身体は否応無く反応し、善がり。一方の頭は混乱と動揺の最中にいる。中に何かが入っているだけで気持ちいいだなんて、ありえないのに、わたしの中は確かに快楽を拾っていて。

彼の大きなそれが、奥をぐりつと押し上げてくる。その感覚に腰が震え、本能的に逃げ出したくなってしまうほどの悦楽が襲いかかる。

強い力でわたしの腰を掴む大きな手のひらも、覆いかぶさられて見えなくなる天井も。何もかもが、わたしを呑み込んでいく――

「私の熱を、感じるか。あや」

「はあ………♡ はー、はあっ♡」

息が、荒い。整えるのに必死で、まともな返事が出来ない。彼の熱があまりにも熱く、同時に――なぜだか、名残惜しいと感じた。

おかしい。数日前まで、彼とわたしは赤の他人だったはずなのに。どうしてこんなに、わたしの心が彼に深入りしてしまっているのか、全く分からない。ただ、今なお挿入の真つ最中どころか挿れたばかりだというのに、その終わりを想像して、どうしようもなく寂しくなってしまうわたしが居るのだ。

「かんじる、から……だから……♡」

「だから、なんだ」

「もっ……と……くひっ！♡」

ずちゅっ！

厭らしい水音が、派手にわたしの最奥を突いた。じんじんと痺れて広がっていくような熱に、全身が呑み込まれていく。

その気は無かったのに。彼が与えてくれる快楽に——堕ちていく。

その時。胸板しか見えていなかったわたしの視界に、彼の顔が映り込んだ。

「……ほう。ここか」

「な……あっ！ ひうつ♡」

なに。わたしは、何も言っていないのに。

何かを悟ったような顔をして、ずぶぶつと肉棒を少し引き抜いた彼が、その角度を変えてきた。

おなか側の、浅いところ。それは確か、Gスポットという部位だったような——と、薄

性の知識を頭の片隅でフル回転させる。その間にも、彼は止まらない。よく分からない力で汲み取ったわたしの急所を、底なしの体力で何度も突き上げてくる。

獣のように発情した男に、こんなにめちゃくちやにされて。

痛いだけのはずなのに。それなのに。

どんなに頭の奥で否定しても、身体が勝手に、感じてしまう。

「ふっ、あ、あ♡ らめ、わた、しいっ♡」

「わたし、なんだ」

「な、んか、はあっ♡ きちやいそ——」

「構わない。——さあ」

——逝け。

「ひあ、あ、あ、ああ——！♡♡♡♡」

がくがく、腰が激しく痙攣する。それをぐっと抑え込みながら、彼の下半身は容赦なくわたしを貫き続けていた。

頭の奥がふわふわして、霞みがかかる。

全てが心地よくて、温かくて——一瞬、すべてを忘れかけた。

自分が誰と、何をしているのか。

ここはどこで——わたしは誰なのか——。

やがて痙攣が収まり、腰がベッドに沈んでも、彼は——止まらない。

「あ♡ ま、まって♡ わたし、わたしっ♡」

「待つわけがないだろう。もう、私は……限界まで待った」

なんの話をしているのか、分からない。数日前に出会っただけのはずのこの人が、何を限界まで待ったのか、見当もつかない。

しかし、それに反論する余裕など、当然残ってはいない。わたしに出来ることは、ただ一つ。

彼に、呑み込まれていく。ただ、それだけだった――。

「ふ……っ」

やがて、彼の吐息も荒くなっていく。ぐっと抱き寄せられるがままに分厚い胸板で押し潰されると、わたしに負けず劣らずの速さで鳴り響く彼の鼓動も聞こえてきた。

その時、わたしの中で――言葉にしがたい感情が広がった。

それは母性の一種なのかもしれない。

わたしに夢中になって、こうして抱きしめて、早い鼓動を聞かせてくれるこの人を。

守りたい——愛したい——そんな、感情が。

なぜ今この瞬間、ただの赤の他人にそんな本能が働いたのか、わたしは理解できなかった。

でもわたしの唇は、勝手に開いて。嬌声ではない言葉を、彼に向かって投げかけていたのだ。

「ねえ……っ」

「なんだ」

「あなた、なまえ——は、っ」

思わず口について出た言葉に、彼は腰の動きを止めた。

それでもじんじんと響く腰の熱さにわたしは震えていたけれど、彼はそんなことお構い

無しで。ふと視線を向ければ、わたしのことを凝視していた。

「……何故、そんなことを聞く」

「呼びたいとおもった……から……」

彼はわたしを見下ろしたまま、しばし沈黙した。やがて静かに、想定外の言葉を言い放つ。

「私に、名前はない。お前がつけろ」

「……え……」

——名前がない？

そんな事があるのか？ この日本に住む、成人男性だと言うのに？

そんな至極当然なわたしの疑問を、彼は想像もしていないだろう顔をしてこちらを見下

ろしている。その瞳には、どこか期待が滲んでいる——ような気がした。

冗談を言ってからかっているだけなのかもしれないけれど、そこで食い下がる気にもなれず、わたしはふわふわとまとまらない頭で彼の名前を考えた。

名前……名前——。

「……う」

「なに？」

「そう……蒼^{そう}は、どう？」

——その、瑠璃色の瞳が印象的だから。

わたしがそう囁き、ゆつくりと頬を撫でると、彼は静かに目を細めた。

「ソウ……蒼、か」

「うん」

「……悪くない」

「ひっ！♡」

やがて、ずちゅっ！♡ と腰が穿^{うが}たれる。わたしが上擦った悲鳴とともに反り返ると、彼はわたしの頭を抱き込むようにしながら、耳元でこんなことを言った。

「呼べ。私の名を……何度でも、呼べ」

「あ……蒼、そう……っ！♡」

「ああ、そうだ。呼ぶんだ……ああ」

やっぱり、彼の言葉は。

洗脳するかのように——わたしの耳へと、届く。

それに、この、名前も。名付けたのはわたしだというのに。

そう、あや、と名前を呼び合っているうちに、どんどん心臓の鼓動が速まり、身体も熱くなっていくのを感じる。

「そう、そうっ♡ わたし、わた、しいっ♡」

「ああ、何度でも逝って見せろ。私も、限界だ……ッ」

まって、待つて。この人、絶対、ゴムしてない。

それが分かっているのに、頭の中で、サイレンが強く鳴り響いているのに。わたしの上擦った声も、震える腰も、何もかも、止まってはくれなくて。

「あや、ッ——!!」

「ふう、あ——！♡♡」

どぶ、どぶつ——と、注がれる。

あまりにも熱すぎる、その感触。

だめなのに。そんなの。いやなのに——腰がじんじんとしびれて、わたしは彼と一緒に、また——昇りつめていた。

深い深い、高い高い、絶頂を、つなぎとめるように抱き寄せられ、激しい鼓動を共有しあつて。

——わたしの意識は、そこで。

ぶつりと——潰つぶえた。

体験版はここまでです。

続きは製品版（全 2 7 1 ページ）でお楽しみください。

[https://www.dlsite.com/girls/work/
=/product_id/RJ01702637.html](https://www.dlsite.com/girls/work/=/product_id/RJ01702637.html)

作者：らずちょこ / イラスト：おかざき / 企画・編集：草次郎